

仏伝文学におけるパターチャーラー比丘尼の 出家物語の位置とその意味

SUMET Supalaset

われわれの研究の当面の目標は、小乗から大乘への仏教の展開に対して、その共通の基層をなすべき仏伝文学の中において、それ自体一つの特異な資料であるところの『大方便仏報恩経』（大正 3, No.156, 略号恩）の占める位置とその資料的本質を画定することに存する。その作業の内実をなすものは各資料中に散在する対応説話の比較文学的検討にもとづく内的証拠の量的な蓄積であるが、その膨大な作業の出発点をなすのは、われわれにおいては、恩が、その成立に関してそれとの特別な関係においてある筈であるところの『賢愚経』（大正 4, No.202, 略号賢）との間に有する 9 例の共通説話の比較検討であり、そしてその作業において嚮導的な役割を果たすものが、パターチャーラーの出家因縁譚なのである。因みに、恩の成立に関しては『仏書解説大辞典』以来簡単に「七卷、後漢代（-A.D.220）失訳」としてそれで済まされるのが常であるが、これは『大方便報恩経』という一卷の全く別の經典で、恩それ自体は『出三蔵記集』の成立（A.D.510-18）をその下限として、中国で編集的に形成された一種の偽経であり、そして、その形成における資料の主なものの一つが、于闐で収集され、A.D.445 年に河西で最終的にその翻訳が成ったところの賢であったとわれわれは推定するのである。

恩と賢に共通するパターチャーラー説話がわれわれの考究にとって特別の意味を有する理由は次の三点に存する。まず第一に、それがセイロンの伝承（いわば南伝）に現れる前半と、その南伝には見出されない（とわれわれが考えてきた）後半との両要素を兼備していること、第二に、それが釈迦族の滅亡という仏伝文学に広く分布するモチーフにそれぞれ異なる仕方で接続していること、そして第三に、本来の、いわば理念型におけるその説話の主人公パターチャーラーが、賢において、何らかの経緯によって「微妙尼」と訳され、それが、賢を承けている筈の恩において「華色尼」、すなわち、ウッパラバンナーのことであると理解されていることである。これら三点は、それを賢と恩とに対して第三の、いわば支点をなすべき資料であるところの義浄三蔵訳『根本説一切有部毘奈耶雜事』四十卷

(194) 仏伝文学におけるパターチャーラー比丘尼の出家物語の位置とその意味 (S. SUMET)

(大正 24, No.1451, 略号雑) の上に移し置くとき、この雑の記述に一つの論理的な限定をもたらし、仏伝文学の形成と展開の全体像の再構成というわれわれの大きな目標に向けて、ごくささやかではあるが、一つの方向性を示唆するのではないかと期待されるのである。

賢及び恩を承けての雑におけるその「論理的限定」が指向される当面の対象は、根本資料たるべき『長老尼偈』の、その全体がキサーゴータミー尼に帰されるところの「十一偈集」の中の第 221 偈の前半、PTS のテキストでいうなら、

passiṃ taṃ susānamajjhe atho pi khāditāni puttamaṃsāni (*Therīgāthā*, PTS, 1966, p.144)

とされる一行の、翻訳可能性からさらに遡っての、意味可能性の問題である。

この一行は諸先学によって次の如くに訳されている。例えば

「更に又汝 (taṃ) は墓所の中にて、愛児の肉の喰わるるを見たり」(増永靈鳳, 『南伝』 25, p.391)

「さらにまた、わたしは、それを (taṃ) 墓所の中で見ました。——子どもの肉が食われているのを。」(中村元, 岩波文庫, p.50)

「それから、私は私の息子たちの肉が墓の中で食われるのを見ました」(K.R.Norman, PTS Translation Series, No.40, London 1971, p.24, 原文は英文)

kalyāṇamittatā (善き友であること) で始まるこの「十一偈集」全体がキサーゴータミーに帰せられること自体には問題はない。ただし、その実体は、キサーゴータミーと、現実とその「善き友」であったのかもしれないパターチャーラーとの間に交わされた対話なのである。すなわち、キサーゴータミーの「女であることは苦しみである」(dukkho itthibhāvo, v.216) という一般的な提示を承けて、パターチャーラーは第 218, 219 偈において、

「産期近づきて、道行きつつ、われは夫の路上にて死せるを見、兒を産みてわが家に達しぬ (218)。

二人の兒は死し、夫も亦路上に倒れぬ、惨苦の婦女(たるこの我)の母と父と兄とは、一つの火葬堆中に焼かれぬ (219)。」(増永靈鳳訳、カッコ内はスメットが補った)

という、その出家に至る因縁譚のまさに「前半」を語り、第 220 偈においてキサーゴータミーがそれにいわば相槌を打つのに続けて、パターチャーラーがその「後半」を語る、それが上の第 221 偈前半の一行なのである。その「意味可能性」は次の如くなる。

くさらにまた私は、その後また (atho pi)、生きながら墓に埋められるという目にも会ったし、また、自分の子供をバラバラにしてその肉を喰わされる、という

仏伝文学におけるパターチャーラー比丘尼の出家物語の位置とその意味 (S. SUMET) (195)

経験もした。＞

この様な「意味可能性」を指示するものこそが、それが賢及び恩に対比されたとき、雑が示してくるところの上に触れた「論理的限定」なのである。

その対比は、上に挙げた三点においてなされる。まず、その第一点、パターチャーラーの出家物語（その女主人公が、雑において、強いてキサーゴータミーとされていることが問題なのであるが…）は、その主部においては、それが前半と後半とに分かれていること、そして、そのかなり大きな分量において、賢及び恩とほぼ同等である。問題は、その女主人公にかかる苦患をもたらしたその因縁譚（恩にはそれは現れない）に存する。このことは第二点、此の出家説話が釈迦族滅亡の説話と関わるその関わり方の問題と関連してくる。

恩においては、釈迦族滅亡の説話が詳しく語られ、それと一続きの流れにおいて「五百釈女」の受難、仏の超人的な威力によるその救済、そして、その「恩に報いるため」に「華色尼」のもとで彼女らが出家したことが述べられる。後日、華色尼は釈女らに、自らの在家時の苦しみは彼女らの受難の苦しみよりもさらに甚だしいものであったとして、その出家に至る物語を語る。しかし、尼にその苦しみをもたらしたものである筈の前生における因縁譚は語られず、そこにこの恩という資料の成立の特殊性を反映させている。

賢においては、五百釈女の出家は釈迦族滅亡の前のことになっている（釈迦族滅亡の説話は説かれない）。釈女たちは迫り来る破滅の予感に脅えて出家はするが、依然として姪欲に苦しめられ、「微妙尼」にすぎる。尼はやはり姪欲に支配されていた自らの在家時の苦しみを語り、彼女らを正心に戻らせる。そして、その苦しみの由因を問う彼女らに対し、その前生譚を語るのであるが、問題はそこにおけるその苦しみの総括の中に存する。尼はその前生において或る長者の妻であったが、自分に子が無いことに苦しみ、長者の若い権妻に子が出来たことに不安を感じて、その頭頂に鉄針を刺してその子を徐々に死に至らしめ、そして、彼女を責める権妻に対して、次の如く呪誓したのである。

「若し汝が子を殺せるならば、我が世の夫をして毒蛇の為に殺され、兒子有らば水に漂い狼に食われ、身は生きて埋められ、自ら其の子を噉い、父母大小、失火して死すべし。」（大正 4, 368b9-12）

この傍点を附した部分が、問題の、「後半」部分の総括なのである。

雑においては、その巻第三十において、パターチャーラーの出家説話が、釈迦族滅亡の説話とは全く別に（それは巻第八に説かれる）、そして、キサーゴータミー

(196) 仏伝文学におけるパターチャーラー比丘尼の出家物語の位置とその意味 (S. SUMET)

の話として説かれる。そして、それに三つの因縁譚が続く。まず第一、賢、恩に於けると同じく正心を失い、裸形で諸方をさまよった彼女は、逝多林で釈尊に出会って正氣に戻り、出家・正勤して、ついに釈尊によって「持律第一」と称せられるに至る（いうまでもなく、持律第一は、理念型において、パターチャーラーの属性である）。後刻、比丘達が彼女の苦患の因縁を問うのに対し、釈尊は賢と同工の前生譚を語る。但し、今度は尼の前生である後妻が、正妻の赤子の喉に竹ぐしを刺して死に至らしめ、それを訴える正妻に対して賢の場合と同様の、但し「生きて墓所に埋められ」という要素は含まないところの呪誓をなすのである。第二は、彼女の父母兄弟の因縁で、彼らは或る僧をそれぞれに呪咀してその報いを受けるのであるが、ここにも墓に埋められる、という要素は現れない。それが現れるのが、賢と全く同構造をとる第三の因縁譚なのである。

出家した釈女たちはやはり姪欲に苦しみ、キサーゴータミー尼にすぎる。尼は「姪欲処の五失」を説き、続いて自らの体験を、但し今はその要約において述べる。ここに初めて「子の肉を食い」に続けて「生きながら墓中に入り」という要素が現れるのである。この事実に対して、われわれは自ら問う、雑の「編集者」はこの要素を賢ないしはその系統の資料から採ってここに加えたのか、と。それに対して、われわれは、件の「論理的限定」に従って次の如くに答える、「違う。すでにパターチャーラーの説話をよく知っていたその人は、物語をその源泉に辿って『長老尼偈』の「十一偈集」に到り、その v.221 の前半にその「後半」を見出した。そして、それが実はキサーゴータミーのものでなく、対話者パターチャーラー自身のものであることに気づくことなく、説話の全体を、彼からするならそれが本来彼女のものであった筈のキサーゴータミーに、強引に引き戻そうとしたのである」と…。もちろん、これは現段階においてはわれわれの一つの仮説であるに過ぎず、その検証を後日に期すべきものではある。

〈キーワード〉 仏伝文学; Patācārā, Kisāgotamī, Uppalavannā, 『長老尼偈』, 『賢愚経』, 『大方便仏報恩経』, 『根本説一切有部毘奈耶雜事』, Avadāna

(国際仏教学大学院大学)